

連載

## 「働き盛りの甲状腺がん体験記(2) 大学病院で「余命」を告げられる」

松本博之(52歳・団体職員・広島県在住)

### 【はじめての大学病院】

母が多発性骨髄腫で亡くなったので、大学病院に見舞いに行ったことは何度もあります。が、自分自身がこんなに早く医療の最後の砦である大学病院を受診することになるとは・・・。

午前中だったので、小学校1年生の息子は授業、妻は息子を送り出した後に合流しました。

広島大学病院の受付で紹介状を提出したあと、呼出受信機を渡されました。

母は神戸大学病院だったので広大病院ははじめてです。

2019年12月21日(土)

朝9時の予約が11時に呼出受信機は震えだし、順番はエコー検査から。

丹念に、丹念に、エコー検査をしている感じでした。

2回目の呼出まで、長い、長い時間がありました。

そのうち受信機が振動し、診察室へ呼ばれました。診察室には数人の医師が待機していました。既に紹介状とMRIの結果は出ていたので、エコー検査の結果が眼鏡をかけた医師から冷静に伝えられました。

「万が一のことは考えて、もって1ヶ月かもしれない」

「えっ、もうひと月しか生きられないの？そんなに悪いのですか？」

「悪いです。何かあったときのために年始年末は大学病院の近くでいつでも対応できるように準備しておいてください」

衝撃的でした。余命まで宣告されました。

医師は、あくまでも最悪の可能性を指摘しただけかもしれません。

私には「余命宣告」としか思えませんでした。

ただ、私の頭の中には一方で実感がなかったのか、その言葉を飲み込んでしまいました。

その後、昼過ぎにまた呼び出され、手術のための入院予約。「入院日や手術日はまだ決まっていますが、できるだけ早くします」と、年始年末は大学病院も休みなので、医師に一任という形になりました。

そして血液検査のため注射で血を抜き取られました。痛くともなんともなかった。注射は大嫌いなはずなのに。実感はないけど、寿命ももうないのかも。

その後、妻が病院に到着したので事の次第を説明。妻は「自分が聞くまで信じない」と言い切った。だけど妻の顔は青ざめていました。

妻がついてから時間がどのくらいたったのだろう。お互い無言。そして細胞検査のために首に針を刺して細胞を吸い取る「穿刺吸引細胞診」。首に針を刺すなど怖いけど、もうすぐ死ぬかもしれないから何でもありだ。2回針を刺してようやくがん細胞が取れたみたい。

細胞検査を担当した若い医師から検査後の注意事項を聞きました。これでもう医師の説明が終わりかもしれないから、妻も同席してもらった。そして、「大学病院の近くにいろということは、もう出張や帰省とかしたらだめなんですよ」と聞いたら、若い医師は「別にいいですよ」。

えっ、さっきの医師(後で分かったのだが、教授だった)は「大学病院の近くから当面離れないでください」と言ったのだけだ。

そして若い医師から「また(最初の)医師から説明がありますから」と言われて最初の医師(教授)による最終説明。

教授は「腫瘍の検査結果が分かるのは1月14日です。でもできれば早めのほうがいいですね。できたら1月7日にしましょう」といわれ、そして再度説明してもらいました。

エコー検査の写真を見ながら  
「甲状腺腫瘍は良性なものが多いが悪性な場合もあります。今回の松本さんの場合は断言できないが、悪性かもしれない。悪性でも、急速に悪化するものとそうでないものがあります」

と言ったので、「その悪性の場合、どの程度まで生きられますか」

「正月明けまで持つかどうかです」。

悪性の場合は急速に腫瘍が大きくなり、窒息死するらしい。

では、先生、がんの中でも良性の可能性はあるのですかと聞いたら。

「数日経って腫瘍が大きくならなければ良性の可能性が高いです。超音波で27日に検査しましょう」



2019年暮れ、厳島神社へ病氣平癒の祈禱に。  
世界遺産の宮島は大改修中だったが、観光客で一杯だった。

「あくまでも万が一の場合、未分化がんという可能性がありますが、それは可能性だけです。

乳頭がんの場合は、甲状腺やリンパ節を取り除く必要がありますが、予後はいいです」といい、12月27日に再度の超音波検査になりました。

あまり文章力がないので、まとめます。

要するに教授が言いたかったのは、「がんと断定したわけではないが可能性が高い。最悪の場合は年を越せない」と言ったまでです。「もし未分化がんの場合は本当に年を越せない場合があるが、その可能性は低く、ましてまだがんと断定はしていない」というスタンスです。

でも、経験上、おそらく甲状腺がんであり、その種別までは断定できない。仮に未分化がんの場合はマズいです」ということを言いたかっただけのようです。そういえば、「万が一」という言葉、言っていましたね。

私は「もう、がんは分かった。乳頭がんなのか、未分化がんなのかが知りたい」と前のめりで言ったのですが、教授は検査の結果を踏まえて、段階的に話をしようとしていたのです。こちらは初めてのがん告知で焦ってしまい、仮定の話を経験の事実のように受け取ってしまったようです。

**(続く)**